

「花燃ゆ」にさそわれて… 初秋の「ニュー・イングランド」 ドライブ紀行

福 永 隆 一 (萩高18回・昭41卒)

『始めに』

昨秋、念願の紅葉時のカナダ訪問に併せて、米国のニュー・イングランド地方・約千五百kmを一週間ドライブ旅行した。大河ドラマ「花燃ゆ」の年初の一場面を見るうちに、松陰先生が、国禁を犯して命がけで確かめようとした、米国の建国の精神に触れんが為、これは、行かねばなるまい！と思いついたのである。

攘夷運動は、単純な排外主義にあらず、独立国家としての日本の近代化を目指した倒幕運動であった。危機感を持った松陰先生他門下生・攘夷の志士は、清末の地理書『海国図志』（魏源著、一八四二年刊）や『坤輿図識』（箕作省吾著、一八四五年刊）等の書物を通じ、国際情勢、取り分け、英国と戦って独立を勝ち取った米国の建国の歴史とその精神を理想のものとして、格別の関心と深い造詣を有していたと言われる（三宅紹宣著

『幕末の志士達のアメリカ独立戦争認識』二〇〇九年刊・山口県地方史研究・第一〇二号を参照）。

米建国の精神について、その道筋を辿れば、①清教徒による「メイフラワー」盟約（一六二〇年）に起源を發し、②一世紀半余の歳月を経て、「独立宣言（一七七六年七月）」において自由と平等を謳い、生命・自由・幸福追求の権利を不可侵のものとして宣言、③「合衆国憲法（一七八七年）」で、人民主権・連邦制度・三権分立を定め、④フランス革命による人権宣言の影響を受けた「権利章典（一七九一年）」を以て人権条項を憲法に付加しながら辿った姿が見えてくる。

そして、年月と場所を隔てながらも、現行の「日本国憲法」においても、人類の共通遺産とも言えるそれら普遍的な理念がそこに引き継がれているように思う。

「ポーツマス（日露戦争講和条約の締結地）」訪問

ニュー・イングランド旅行の初日、九月二十八日(月)朝、モントリオールからグレイハウンド・バスで国境を越えてバーモント州の州都・バーリントンの空港まで移動（出入国手続きを含め所要三時間余）、ここでレンタカーに乗り換えて、お隣のニュー・ハンプシャー州の「ブレトン・ウッズ（一九四四年、第二次大戦後のIMFを核とする国際通貨体制を決めた会議開催場所）」を訪ねた（走行百八十五km／二時間半）。

翌二十九日(火)は、リンカーンの町から、紅葉を迎えた「カンカマガス・ハイウェイ」を抜けて、十五時過ぎに大西洋に臨む港町・ポーツマスに到着した（移動距離…約二百五十km）。早速、日露戦争終結に伴うポーツマス会議・条約関連資料が展示される「ポーツマス歴史協会（J・P・ジョ



「ポーツマスドラマ」の額縁（ポーツマス歴史協会）
中央に明治天皇・ルーズベルト大統領・ロシア皇帝のニコライ2世
（下部は両国全権の小村寿太郎とセルゲイ・ヒュッテ他2名）

ーンズ・ハウス」を訪問したが、交渉成立を祈るポーツマス市民が両国全権一行に示した数々の温かいもてなしを知ることが出来た。そこに全権大使の小村寿太郎が座った椅子を見つけ、先年、生家のある飢肥（宮崎県）の城下町を訪れた事を思い出した。下級武士の家に生まれた彼は、大

学南校(後の東京大学)に進み、第一回文部省海外留学生としてハーバード大学に留学、同ロー・スクールを卒業、後に第一次桂内閣で外務大臣に就任、日英同盟(一九〇二年)及びポーツマス条約(一九〇五年)を締結、更に第二次桂内閣では関税自主権の回復を果たした(一九一二年)稀有な人物である。

難交渉の末に締結され、戦争の早期終結を実現させたポーツマス条約ながら、戦時の大増税を臥薪嘗胆の上に耐えた国民大衆は、戦費・兵員が底をつき、戦争継続困難な実態を知らず、高額賠償金を獲得出来なかったことに不満を募らせ、暴動「日比谷焼き討ち事件」まで発生し、非難が交渉全権の小村に集中した。貧乏くじを引いた小村だが、日本外交史にその名を遺す政治家の一人であることに違いない。

交渉を仲介した米国大統領のセオドア・ルーズベルトが、条約締結の翌年(一九〇六年)にノーベル平和賞を受賞したことも紹介されており、米国人初の平和賞受賞者であることを知った。条約調印式が行われた歴史的建造物(Rockingham House)は、近くにあつて、今は「ライブラリー・レストラン」と呼ばれ、食事を提

供している。

(閑話休題…その一) 日露講和条約締結後の日米関係に踏み込んで小村外交を眺めると評価が分かれて見える。講和条約で得た南満州の鉄道権益に対し、共同経営の提案を受けて一旦結んだ仮契約(桂・ハリマン協定)を、ポーツマスから帰国した小村が反故にしたことである。フィリピン獲得後、中国大陸進出を目指した米国は、ロシアの南下をきらい、国内で戦費調達を認めるほどに日本に好意的であったが、講和条約締結後は、前後して発生した黄禍論・排日移民運動をも伴い、反日の気運に転じた。その後双方の迫った道のりは莫大な代償を伴った(排日移民法の制定、満州事変→満州国の成立、リットン調査団の派遣→日本の国際連盟脱退、日米開戦→終戦に至る道のりは御高承のとおり)。歴史に「もしも」の類の話は尽きないが、様々に思いが及ぶ。

「奇兵隊の原型は「ミニットマン」?!」
… 独立戦争の戦跡(レキシントン、コンコード)を巡る

全権一行の宿泊ホテル(Wentworth by the Sea)を翌朝見物し、メイン州海岸を北上してポートルランド

市を訪問後に、反転南下、マサチューセッツ州のレキシントンに夕刻到着した。

レキシントン中心部にある三角形の緑地帯「バトル・グリーン」を翌十月一日(木)早朝に訪問したが、この一角に「ミニットマン」の像がある(写真参照)。ミニットマンとは、危急の際に一分間で現場に駆けつけ可能という、農民を中心とする義勇兵(民兵)のことである。一七七五年四月十九日、七十七名のミニットマンが、レキシントンの先十二km、義勇軍の武器弾薬庫のあるコンコードを目指してボストンから進軍してきた英国軍



「バトルグリーン」のミニットマン像(レキシントン)

を待ち受け、独立戦争の戦端が開かれた場所がこの地である。バトル・グリーンには、作戦本部となった居酒屋「バックマン・タバーン」と、戦鬪で犠牲となったミニットマン七名が眠る記念碑がある。更に五百m先には、ポール・リビア(後にH・W・ワーズワースの詩「真夜中の疾走」でその名が知れ渡った)が、ボストンより英軍の発進を報じる伝令として、前夜に馬で駆け付けた「ハンコック・クラーク邸」がある。

松陰先生が松下村塾で「草莽崛起」を唱え(一八五七年)、「西洋歩兵論(一八五八年)」で近代戦における歩兵の用兵を説き、周布政之助の支持を得た晋作らにより組織化(一八六三年)され、大村益次郎らの作戦指導により四境戦争(一八六六年)から戊辰戦争(一八六八年)を戦った奇兵隊であるが、その原型はこの「ミニットマン」にあるように見える。民兵のミニットマンがレキシントン・コンコードの戦いを制した義勇軍と、志願制ながら長州藩諸隊の一つとして給与支給と位階を伴う長州藩正規軍としての違いはあるが、「草莽」という原点は同一である。八十余年の年月と日米、海を隔てた両国ながら、ミニットマンと奇兵隊を眺めると興味深

い。米国の独立・建国の精神と松陰先生を通じた倒幕・明治維新のかわりを直接に現地で触れてみると、これが旅の動機の核心部分だが、先述の三宅氏の論文及び昨年秋市における同氏の講演は、両者の密接なかわりを適格に指摘するものと思う。

維新後百五十年余、松陰先生の像（イメージ）も時代とともに変遷をした。第二次大戦で祖父と叔父を失った筆者は、一時期「至誠」という言葉が好きになれなかった。満州事変、日米開戦、終戦に至る期間、若者の心を駆り立て戦場に送り出した「呪文」のように感じていた。戦前に編集された『吉田松陰全集』には当時の価値観が影響していること…、そして、これからは、当時の未収録資料も活用したより客観的な松陰研究が深まることを期待したいとの、三宅氏の研究姿勢に敬意を表する。

それにしても、前述の『坤輿図識（一八四五年刊）』は、福沢諭吉著『西洋事情（一八六六年初遍刊行）』以前における名著で、幕末の日本知識層に大きな影響を与えた傑作であった。ネット検索すれば（「コトバンク」による）、かの大老・井伊直弼はこれを外交指針としたとある一方で、松陰先生は、生涯にわたって愛読して

いたことが確認できるとされる（前述三宅氏論文の註四・松陰の『坤輿図識』に関する読書や講読の記録の項を参照）。

「清教徒・新大陸上陸の軌跡」

①清教徒初の入植地・プリマス

レキシントンから、英軍の進軍ルート「バトル・ロード」を十二km走ってコンコードに到着、英兵百人余とミニットマン四百人が衝突した「オールド・ノース橋」を見物した後、ボストンを迂回する外環フリーウェイを約百三十km走行、ケープコッドで入植地の雰囲気の色濃く残す「サン

ドイッチ」の町を訪れた。ケープコッドとはマサチューセッツ州南部、大西洋に右肘を曲げて突き出したような形の岬の事で、ボストンよりこの先端のプロビンスタウンまでの距離は約百九十kmである。

サンドイッチの町で昼食後、ボストン方向に少し戻り「プリマス・プランテーション」を訪問した。一六二〇年、メイフラワー号に乗った清教徒百二人は、自由な信仰を求めて英国国教会と決別し、九月六日に英国南西部のプリマス港を出航、二カ月に及ぶ航海の末、予定地よりはるか北にあるケープコッドの先端（現在のプロビンスタウン港）に投錨した。

一カ月に及ぶ慎重な調査・探検後、漸く上陸・入植を開始したのは既に初冬であった（出航した港に因んで、この地の名前をプリマスとした）。長期航海の疲れと厳冬によりメンバーの半数近くを失いながらも、先住民の協力を得てトウモロコシやジャガイモを育てながら、漸く当地に入植・定住を果せたという。往時の生活を伝えるのが、この野外博物館（一九四七年にオープン）の「プリマス・プランテーション」であり、園内では従業員スタッフが入植当時の衣装を着て往時の生活している姿を見るこ



清教徒入植地の風景（プリマス・プランテーション）

とが出来る。

この後、「プリマス・ロック（上陸地点にある踏み石）」と、係留された「メイフラワー二世号（原寸大の複製）」を見物してから、市内のホテルにチェックインした。

清教徒達は、プロビンスタウンに投錨後、先述の如く入念な探検・調査の上に入植を始めたが、特筆すべきは、事前に、「メイフラワー盟約」と言われる、多数決原理に基づく社会契約を結んで自治を盟約したこと、そして、この契約に乗船者成人男子全員が署名し、その規則に各々が拘束されることを約束したことであ



メイフラワー2世号：原寸大複製（プリマス港）

る。この盟約は、この後百五十余年後に起草された「合衆国憲法」に大きな影響を与えたと言われている（米国の歴史と民主主義の基本文書／在日米国外使館レファレンス資料室編集・発行）。

② ケープコッド突端の町・プロビンスタウン

十月二日(金)午前中にケープコッド玄関口の「ハイアニス」を訪問、チャタムの町を経由して、メイフラワー号が当初投錨し、上陸第一歩を印した半島突端の記念碑のそばにある「プロビンスタウン・イン」に投宿した。十八世紀に捕鯨基地として栄えた往時の雰囲気を見ることが出来る老舗ホテルである。市内丘の上に、「ビルグリム・モニュメント（高さ七十七mの塔）」があり、その下の博物館では清教徒の足跡、貿易港・捕鯨基地として発展した町の文化・歴史が紹介されている。

（閑話休題…その二）JFKの面影を求めて立ち寄った「ハイアニス」

J・F・ケネディの影響を少なからず受けた団塊世代の一人として、是非にと当地ハイアニス訪問を加えた。ケネディ家の別荘のある当地には、「JFKメモリアル」や彼の博物館があり、後者では家族・友人達と

撮った、絶頂期のにこやかな写真を多数見ることが出来る。海側からしか見ることが出来ない別荘ながら、数日米南西部を襲った大型ハリケーン・ホアキン(Hoquin)の余波を受けて、クルーズ船が当日に欠航となったのが残念であった。

「ジョン・万次郎の足跡をたどって」

：フェアヘブン／ニュー・ベッドフォード訪問

一八六〇年頃まで、捕鯨基地として栄えた二つの町が、ボストンの南方約百km、河口に向かい合うようにある。万次郎が過ごした捕鯨船船長の家は、現在二人の名前を付けて「ホイットフィールド・万次郎友好記念館」として一方のフェアヘブンの町に保存されている。記念館訪問は予約制だが、メール連絡を取った館長に勧められて、第十五回・万次郎フェスティバル開催中の十月三日(土)に訪問した。当日は万次郎の故郷・土佐清水市から総勢約二十名にも及ぶ親善使節団一行が来訪し、市民ホールで盛大なフェスティバルを開催中であった。

万次郎の一生を諸資料からたどれば、十四歳で漁に出て遭難(天保十二年／一八四一年)、漂流後の無人島生

活中に捕鯨船に救助されてハワイに移動、船長に見込まれて養子となり、この後三年余り船長の住む町で英語・数学・航海術・捕鯨術を学んだ。一旦捕鯨船乗組員として働くも、望郷の念捨て難く、ゴールドラッシュに沸きカリフォルニアで資金を貯め、鎖国中の帰国に慎重を期して、琉球(一八五一年)→薩摩→長崎を経由して、漂流から十二年目・ペリー来航の前年(嘉永五年／一八五二年)

に、二十五歳にして漸く故郷の土佐に帰還した。後に幕府に招聘され、日米和親条約締結に尽力、一八六〇年日米修好通商条約批准書交換の為の

遣米使節団の一員として、勝海舟、福沢諭吉らと共に咸臨丸で再渡米を果たしたとある。

ホイットフィールド船長は、教会で人種的差別を受けた万次郎を守るため、自らの宗派と通う教会を変え、るまでした有徳な人物であった(地球の歩き方…ボストン／ニュー・イングランド地方六州ガイドによる)。船長宅が老朽化し、売りに出されたことを知った聖路加国際病院の日野原重明理事長(現名誉院長)が、発起人となり寄付金を募り、二〇〇九年に全面改装されたのが現在の友好記念館である。

さて、対岸のニュー・ベッドフォードには、米捕鯨の隆盛を伝える「捕鯨博物館」がある。ランプの灯火や潤滑油の代替として、石油系の油が鯨油に取って代わるまでの間、この町は米捕鯨産業の中心地であった。

嘉永六年(一八五三年)、米海軍東インド艦隊のペリー提督が開国を求めて来航した第一目的は、捕鯨船の「マキと水」を求めての事であった。太平の、眠りを覚ます上喜撰(蒸気船)、たった四はいで、夜も寝られずと詠われて、降ってわいたような突然の黒船来航のように伝えられるが、実はそうではない。西欧諸国の中



ホイットフィールド・万次郎友好記念館 (フェアヘブン)

で、唯一日本と独占的に貿易を行っていたオランダの国力衰退に伴い、ペリー来航以前に既に十数度にわたって、米国人水夫が乗船し、オランダ国旗を掲げる米船が出島に来航していたと博物館内に説明がある。他の西洋列強に後れを取って東洋進出を計ろうとした当時の新興国・米國が、事前調査を重ねて計画的に来航したことを示唆するものである。

「ボストン訪問」…一冊の本が世界を変えた：漸くフリーダム・トレイルを踏破

ボストンの初日四日(日)朝は、フェ



クインシー・マーケット (ボストン旧市街)

アヘブンからボストン市内を通過してチャールズ川対岸のケンブリッジに直行、大改修を終えたハーバード大学美術館を訪問した。大学生協のカフェで昼食を済ませて、レンタカー返却に便利の良かった市内バック・ベイ地区の「コープリー・スクウェア」に近いロウズ・ホテルにチェックイン、午後には予定どおり、当地名物のダッグ・ツアー(アヒルの形をした水陸両用車による市内ツアー)を楽しんで初日の観光を終えた。旅の最終日の早朝、ダウンタウン中心にある「ボストンコモン(一六三四年清教徒が購入、以来市民共通の広場」と呼ばれる米國最古の公園)から出発して、「フリーダム・トレイル」の散策を始めた。フリーダム・トレイルとは、ここに始まり、チャールズタウン(ボストン湾河口対岸の町)のバンカーヒル記念塔に至るまでの間の全十六か所の史跡を全長4kmの距離で結ぶ道のこと、歩道に敷かれた赤レンガを挟んだ二本の線が示すレーンを辿れば順に史跡を散策できる。トレイルの途上、



フリーダム・トレイル (レーンの上に立つ筆者)

グラナリー墓地(独立戦争や建国の英雄たちが眠る墓地)、B・フランクリン(独立宣言起草者)立像、新旧州議会場、ボストン・マサツクル跡(英兵発砲による市民五名の虐殺現場跡)、ファニエルホール(演説・集会場)等の各所で、暫しその場に佇み、往時の雰囲気に入り込んだりしながら、昼食はクインシー・マーケットでボストン名物の「クラム・チャウダ(ボストニアンは、何故かチャウダー」と発音しない!)」に舌鼓を打って、充実した時間を過ごすことが出来た。初回の四十五年前と前回十五年前に訪問済みのチャールズタウン側の史跡を加えて、三度目にして漸くトレイルの踏破が適ったことに満足至極であった。

さて、独立戦争開始翌年に発刊された小冊子『コモン・センス(トマ

ス・ペイン著・一七七六年一月刊)』を、世界百科事典(平凡社刊、第二版)他の言葉を借りて紹介したい。「…、英本國からの分離・独立は当然の常識(コモン・センス)と訴え、三ヶ月余で十二万部を売り上げた新大陸空前のベストセラーであり、独立戦争開戦当初に劣勢を強いられた独立派に勇気と展望を与え、独立の気運を一気に高めた」とある。正に、一冊の本が世界を変えたと言えよう。

一方、幕末の我が長州に目を転じれば、第二次長州征討の布告の翌年三月(慶応二年/一八六六年)、「長防臣民合議書」なる檄文が三十六万部



フリーダム・トレイルにある、ポール・リビアの家

発行された。これは幕末長州の人口に比べれば、実に莫大な数である。歴史研究家でない筆者の、いわば素人の思い付き故に、別途専門家による検証を待たねばなるまいが、筆者には前述のコモン・センスとこの檄文がかぶってみえる。九十年の年月と場所を隔てながらも、仮にも、この檄文の原点がコモン・センスに在るとすれば、実に愉快ではないか！

長防臣民合議書は県内に多数現存すると聞くが、現在、萩博物館で特別公開中の「高杉晋作資料室」にも展示がされている。ネット検索して『日本史資料(歴史学研究会編、岩波書店一九九七年)』の六二頁以降の解説を借りれば、本資料(合議書)は、第二次長征軍を前にした長州藩当局が、その行動の正当性と、徹底抗戦せざるを得ない理由を、一方では領民全員に徹底させ、他方では日本国民全体に呼びかけるため刊行した檄文とある。臣(家臣・士族)に民(領民全体)を加えて発した檄文であることが興味深い。この起草者が兵学門下生として明倫館で松陰先生の指導を受けた山縣半蔵(起草時は宍戸備後助、後に宍戸璣)であることが知られ、これぞ松陰先生の「草莽崛起」ではないかと思えてくる。防長二

州の一致協力体制と討幕気運を一気に高める契機となったが、正しく独立戦争時に発刊されたコモン・センスが先に示した道ではあるまいか！ラジオ・テレビのない時代にあつて、コモン・センスが示した広報(パブリケーション)の力(効用)について、松陰先生・門下生他尊王攘夷の志士に、先述の坤輿図識等の書物を通じて相応の認識があつたとしても、不思議ではあるまい。

因みに、宍戸備後助は四境戦争に際し長州藩が対幕府交渉の為に広島に送り出した藩主父子の名代であり、大河ドラマで描かれた『文』の夫の小田村素太郎(小田村伊之助、後の楫取素彦)はその随員であつた(萩市史第一巻九七六頁より)。

「終わりに」

戦後七十余年、空気のように、あつて当たり前のように慣れ切つてしまつた現行憲法であるが、冒頭述べたように、合衆国憲法やフランスの人權宣言に繋がる人類の共通遺産・普遍的理念をそこに引き継ぐことを心に留めたい。かの旧ドイツのワイマール憲法が、ナチスに合法的に葬り去られた歴史を知る我々は、世代を超え、歴史に学びながら、憲法のメ

ンテナンスを心掛けねばなるまい。国会において幾度の審議を経て成立した現行憲法が、戦後占領下において成立したことを以て、外国製の憲法と指摘して、改正すべしとの論が、一部団体及びこれに繋がる面々にある。筆者には心の狭い国産品愛好団体に映るが、以下に「煎じ薬」二通を進ぜよう。製品一部に海外産品・輸入品が含まれようとも、良いモノは良い。けだし、仏教伝来以来、外来の有用なるものを伝統に生かし、発展させてこそその日本の文化である。

一つ目は、松陰先生が、兄の梅太郎(杉民治)との安政元年(一八五四年)十一月二十三日付け(野山獄入獄中と思われる)の往復書簡の行間書き込みに見つかる(吉田松陰全集第七巻)。即ち、「…松陰の著述の西洋臭いことに対し(叔父の)玉木文之進が眉をひそめるだろうと(梅太郎が弟・松陰に)注意すると、(松陰先生は)西洋臭きか。身についた糞はくそうない。あは、と応じ、自身も自分の学問が西洋臭いものであることを堂々と認めている」とある。「前述の三宅氏論文註八の引用記述を参照、(この部分は筆者補足)」。

二つ目は、平成二十五年(二〇一三年)十二月十八日、傘寿を前にした天

皇陛下が、宮内記者会代表質問に対し述べられたご感想であり、一部をここに紹介する。…戦後、連合国の占領下にあつた日本は、平和と民主主義を、守るべき大切なものとして、日本国憲法を作り、様々な改革を行つて、本日の日本を築きました。戦争で荒廃した国土を立て直し、かつ、改善していくために当時の我が国の人々の払った努力に対し、深い感謝の気持ちを抱いています。また、当時の知日派の米国人の協力も忘れてはならないことと思います。…

軽々なコメントは避けねばなるまいが、陛下の強いお気持ちに窺われるこのお言葉を、煎じ薬とするまでもあるまい。お言葉のままに噛みしめてみては如何であろうか。

(山口日米協会理事)

